



TITLE:

先輩から卒業生へのメッセージ

AUTHOR(S):

加藤, 寛; 谷口, 繁紀; 徳田, 竜一; 峯村, 英児; 加地, 健一; 濱, 和彦; 岡崎, 将也; 猪俣, 明彦; 清谷, 春樹; 藤嶋, 正信

CITATION:

加藤, 寛 ...[et al]. 先輩から卒業生へのメッセージ. 岩本ゼミナール機関誌 2001, 5: 164-171

ISSUE DATE:

2001-03-26

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56881>

RIGHT:

先輩から卒業生へのメッセージ

1期生 加藤 寛 (東京エレクトロン勤務)

ご卒業おめでとうございます

この1年はゼミにとって波瀾の年になりましたが、皆さんのおかげで1年の締めくくりの機関紙までたどり着くことができました。

私事ですがイギリスに赴任することが決まり、今準備で忙しくしています。青竹会に1期生が参加しないのは、まずいので木村や石井に後はお願いすることにして、私はイギリスで先生やゼミ生が遊びにきて一緒に酒を飲むのを楽しみにしています。もちろんイギリスも飲酒運転については厳しく罰せられますので、そのあたりは気をつけたいと思います。

ゼミ運営にご尽力いただいた皆さんにお礼申し上げますとともに、来年度に更なるご活躍を期待しております。

2期生 谷口 繁紀 (住友銀行勤務)

6期生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。

ゼミ論集編集の時期になると、毎年現役ゼミ生から連絡が入り、コメントを求められます。

この時、学生時代の自分と少し年齢を重ねた自分を感じます。どうやら年々両者の間のGAPは広がっていくようです。皆さんもすぐにおわかりになると思います。

そんなことを考えている私は、今「優良債権とは言えない債権」を如何に処理するかという仕事をしています。

みなさんの中には、債権流動化とか、バルクセール等の手法を用いて簡単に処理できるのではと思われる方もいるでしょう。しかし、現実には、その条件を満たすものは数少なく、「そういう債権」問題の根が如何に深いかを痛感しています。

わずか4年程度の社会経験で、理論と現実の差を目の当たりにしています。みなさんは、これから社会人になれるか、学生を続けられるか、他の道を歩まれるかする訳ですが、常に理論と現実の

GAPを追究し続ければ、何か見えてくるのではないかと思います。私は未だ模索中ですが、そこに何かがあるのではないかとすることは、確信しています。新しい世界に進まれてましても、今学んでいる姿勢を持ちつづけて下さい。

2期生 徳田 竜一

ご卒業おめでとうございます。

この時期になると、私自身の卒業時を思い出します。卒業当時、日本経済が先の見えないトンネルの中を走っていたにもかかわらず、多くの人にはその実感がなかったように感じました。その後の四年間で、「不倒」と思われていた大企業が次々と倒れ、日本経済の脆弱さが広く世に知れ渡りました。私はアメリカにもちょうど同じような時代があったと認識しております。経済力の低下に喘いだ1980年代後半です。一般にその時代のアメリカは自身喪失でやる気を失っていた時代であったように言われています。一方、現在花開いている新しい企業は実はその時代に大きく成長を遂げていたのです。

今の日本がまさにそのような状況にあると思います。株価13000円台が象徴するように日本売りが続出しています。そんな中、私は様々な方面で新しい胎動を強く感じてます。「Be entrepreneur」。私はこの言葉を新しいものを作り出していける行動であると解釈します。卒業後進まれる各方面にてこの様なことが求められるのではないのでしょうか。皆さんのこれからのご活躍が21世紀の世の中を作り出していくと確信してやみません。

2期生 農林水産省経営局経営政策課 峯村 英児

6期生のみなさん御卒業おめでとうございます。ここ数年来日本の経済・社会の構造改革が叫ばれるなか、岩本ゼミの卒業生として、みなさんが各分野で御活躍されることを期待しています。

私は現在、農業者のための公的年金制度の改革作業の真っ只中にいます。農業者年金制度は、農業者の急速な高齢化により破綻の瀬戸際に立たされており、年金額の削減が最大の課題となっています。私の公務員生活もはや4年を過ぎようとしています。日本の行政の最前線に立っているという満足感と現在の行政システムへの不満とが自分の中で格闘しているというのが正直な今の気持ちです。

近年学生の間での国家公務員人気が落ちつつあると言われています。また、公務員への風当たりが止む気配はありませんし、行政の役割の範囲も大きく変化しつつあります。しかし、行政の必要性は変わらないのです。国家公務員になってみたいと思われる方は、気軽に連絡して下さい。就職活動の参考になれば幸いです。そして一緒に霞ヶ関で働くことになったらよりよいのですが。

3期生 加地 健一（トヨタ自動車株式会社）

卒業生の皆様へ

いろいろな意味で波乱の多かった岩本ゼミのこの一年、
皆様が無事卒業できることを、たいへんうれしく思います。

大量採用だったバブルの頃に比べると、皆様は
就職/進学するのに大激戦を闘ったことでしょう。
昔の学生とは一味違う、と期待されている事を肝に銘じ
マンネリになりがちな社会人生活を、一日、一日、
高い意識を持って過ごしてください。(ああ、耳が痛い・・・)
よく、3年経つと差が出るといいます。
私も今年で社会人を3年終えたことになるのですが、
果たして、差はついたのか、つけられたのか。

入社時と比べると、体重差は随分つきましたが。

今、一つ言えるの事は、頭の気分転換の為にも、一つ、
のめり込める趣味を今の内に作っておいてみては。
私は車が趣味ですが、仕事も車関係なので、
頭の転換転換には、あまりなりません。
最近はワインを趣味として極めようと考えていますが、
酒と車は、間違っても混ぜてはいけないので、
両立が少々難しいのがネックになっています。

ここで、新しい世紀に、新たに社会に旅立つ皆様へ、一言。

There are more things on this heaven and earth, Horatio, than

what you can think of in your philosophy.

絶えず、新しいものを受け入れる柔軟な頭をもっていてください。

3期生 濱 和彦 (防衛庁防衛局計画課勤務)

6期生の皆さんへ

6期生の皆さん御卒業おめでとうございます。

3期生の中でも僕が一番6期生の皆さんとは面識があるのではないのでしょうか。僕が5回生で夏のゼミ合宿に参加させていただいた時、皆さんはゼミに入ったばかりの2回生でしたね。その皆さんがもう御卒業されるという時の流れのはやさには感慨深いものを感じます。とても元気良く真面目にゼミに取り組んでいる若い皆さんを見て、岩本ゼミの今後の発展を確信し安心したものです。実際、その時から現在まで皆さんが中心になって岩本ゼミを引っ張ってきてくれたことと思います。この場を借りて御礼申し上げます。いろいろな事があったと思いますが、本当におつかれさまでした。

岩本ゼミの良いところは、岩本先生の人柄ももちろんですが、ゼミ生が仲良く楽しく真面目に勉学に勤しむ風土があるところだと思います。真面目にゼミに取り組むからこそゼミ生は結束し仲良くなり、結束し仲が良いからこそゼミ生は真面目にゼミに取り組むことができるという良い循環が出来上がっているのだと思います。6期生の皆さんはこの流れを最も良く体現されていたのではないのでしょうか。後輩の皆さんにもこのような風土を今後とも引き継いでいていただきたいと思います。

現在、僕は防衛庁防衛局計画課という部署で防衛力整備にかかる仕事をしています。業務内容は岩本ゼミで学んだ事とは直接に関係はしませんが、ゼミで培った物の考え方や知的好奇心は現在でも非常に重宝しております。6期生の皆さんも今後様々な場で活躍されていくことと思いますが、岩本ゼミの3年間で得られたものを社会に還元していただきたいと願います。

6期生の皆さん本当に御卒業おめでとうございます。これからが始まりです。お互いに社会人として頑張っていきましょう。

ゼミ機関誌発行に寄せて

まずは、六期生の皆様、ご卒業おめでとうございます。

六期生の皆様とは面接の時より1年間をゼミでともに過ごしましたが、その闊達で快活（豪快）な姿は、インゼミ、合宿、青竹会においても、一際輝いており、本当に岩本ゼミによい意味でカルチャーショックを与えてくれたように思われます。勉学にゼミ内の交流にここまで活発であった世代はなかったのではないかと思います。明るく、そしてめりはりのあるゼミ活動を行ってくれたことを頼もしくも、誇らしく思っています。

そして、個性派揃いの六期生を無事まとめてく、ゼミを盛り上げてくれた丸山君、本当にご苦労様、岩本ゼミのゼミ長がこんなに大変だとは思わなかったというのが感想だったのではないのでしょうか。個性派が多く集う岩本ゼミをまとめて一つのベクトルにし、舵をとるのは大変な作業ですが、そこで苦労したことはそのまま君の力になり、今後に生きてきます。岩本ゼミのゼミ長であったことを誇りに、仲の良い六期生の仲間達と共に卒業を迎えて下さい。

次に、私の近況をここで簡単に述べさせていただきますと、相変わらず仕事に忙殺され、合間を縫っては勉強（会計学）をするという毎日を送っています。現在の通信業界は、あまりに多くのファクターを抱えており、一企業どころか、業界全体、政府すら、どの状態をもって適正な競争状態なのか、どの技術をもって、どこまで市場を創出させることができるのかといったことについて正確な青写真を描けず、低迷する日本経済の見通し同様、暗中模索の状態となっています。それだけに、この通信分野については、規制緩和の経済に与える影響、通信インフラの国際的な優位が日本の競争力にどれだけ貢献するか等、面白い研究テーマが山積しているものと思いつつ、なかなかそういった研究に時間をかけることが許されないのが残念です。仕事に忙しくなればなるほど、ゆっくり勉強をしてみたという思いが募ってくるというのが勤め出してからの実感ですね。七期生以降の岩本ゼミ生の皆様も興味あるテーマに向き合って、じっくり突き詰めることのできる今の時間を大切に、日々のゼミ活動に研究に頑張ってください。

最後にもう一度、六期生の皆様へ、君たちが岩本ゼミに新風と活力を与えたように、今度はそれぞれの職場に舞台を変えて存分にその持ち前のエネルギーで活躍してください。君たちの活躍が日本経済にもカルチャーショックを与えてくれることを楽しみにしています。それでは、卒業おめでとう！

御卒業される方々へ

御卒業される皆様、それぞれの道に進まれる方々、誠におめでとうございます。

また、記念すべき機関誌第5号の発刊を心からお喜び申し上げます。

もはや四期生である我々も、岩本ゼミの中でもすっかり古株の一員になってしまったことでしょう。

卒業生・現役生のゼミでの御活躍は機関誌を拝見させていただくとして、
人数の少ない四期生の方といえば、現在その半分が霞ヶ関界隈で生活しておりますが、
場所的には、勤務地が実は道を挟んで向かいだったりとか、
とても近いはずなのですが、これが非常に遠くて滅多にお互いで会う機会もなく、
最近になって主なメンバーで、初めての昼食会が開けたぐらいです。

まあ、就職等で上京する機会があれば、
関東の岩本ゼミのネットワークを広げてみんなで集まりましょう。

私の方は、省庁再編により通商産業省も経済産業省に移管されましたが、
引き続きその外局である資源エネルギー庁に勤務しております。
皆様になじみの薄いエネルギー政策は、
安全保障をはじめ、財政・税・経済・技術・環境など
非常に多岐に渡る問題が絡み合っており、これが意外と面白いです。
当然、稼ぎは少ないですが。

非人間的な労働環境ゆえ、
東京ライフを満喫しているとはまだまだいきませんが、
この霞ヶ関界隈にお立ち寄りの際は、御一報下さい。

6 期生のみんなへ

卒業おめでとう。みんなと出会ったのがつい最近のような気がしますし、一方でみんなとはもう長い間仲良くしてもらったような感じもします。

みんなはこれから始まる社会人生活に向け、期待と不安を抱いていることでしょう。学生と社会人は違うとよく言われます。確かに、日常の自分を取り巻く環境や生活リズムは大きく変わるでしょう。しかし、わずかばかりの社会人歴ですが、僕が体験したところでは、好奇心を刺激されて新しいことを吸収したり、自分の興味のあることに真剣に取り組んだり、あまりやりたくないのにどうしてもやらなければいけないことがあったり、時には自分の不甲斐なさに悔しい思いをしたり……、といったことが毎日起こっています。思い起こせばこういったことは、インゼミやらゼミ発表やら、岩本ゼミで過ごした毎日でも起こっていたことです。そういう意味では社会人になっても何も変わっていないなあと思います。

そうであるにも関わらず、時々、「学生の頃は良かったなあ」とか「もう1回学生に戻りたいなあ」とか考えてしまうのはなぜでしょうか？ そんな時の自分は、社会人である今を一生懸命生きて楽しんでいないか、学生時代に一生懸命になりきれずにやり残したことがあるかのどちらかではないかな、と思います。

そうして考えると、結局は学生であれ社会人であれ、毎日を同じように充実させていかなければ、人生どこかで後悔したり、今が嫌になったりしてしまうのではないのでしょうか。そんなことを考え、みんなとまた会える日を楽しみにしつつ、毎日頑張っています。みんなが価値のある毎日を過ごし、ますます活躍されることを願っています。

岩本ゼミのみなさまへ

5 期生 京都大学大学院経済学研究科修士課程 藤嶋正信

第 6 期生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。特に丸山君は、青竹会司会、機関誌編集と、本当にお疲れさまでした。

思えば、君たちとは、入ゼミの面接から合宿やら数多くのコンパ、インゼミなど、多くのイベントで共に過ごしてきました。もはや私の同期、5 期生と接する時間よりも多いのです。同じ釜の飯を食ってきた後輩たちがこうしてまさに社会に羽ばたかんとする。巣立つ雛鳥を見る親鳥の心境です。いやむしろ、優秀な部下たちが次々と出世していくのを笑顔で眺

める出来の悪い上司の心境、といったほうが近いでしょうか。私はまだまだ院生、社会に対して何の貢献もしていませんし。

大学院生とは、社会に対して直接に付加価値を生み出すことはない存在です。ただひたすら教科書を読み、数式を展開し、モデルを作り、ニタニタと満足する。はたしてこれが自分の望んでいた人生か？と自問する毎日です。将来研究者になる為の自己投資の期間だと考えることもできますが、必ずしも研究者になれるとは限らないのが厳しい実情です。

大学院の同期で研究者を目指してる友人に私はよく、将来に不安はないのかと聞くのですがみな一様に、「ただ好きなこと(研究)をやりたい」と言います。先の不安を口にするものはほとんどいません。厳しくとも、ただ自分の好きなことをやる。なんと素敵な世界でしょうか。刹那的ではありますがけれど。これから社会にはばたかれる卒業生のみなさんはどうでしょう。残念ながらまだ学生である私には社会の偉そうなことは言えませんが、事前に夢見ていたよりも厳しく、失望することももしかしたら多いかもしれません。熱く自分の将来の夢を考えるのもいい。でもたまには、自由気ままに目先の快楽を追求してみたりするのもよくありませんか？ 学生のころを思い出して。